

堀切佑太郎「IT系フリーランスが働きやすく暮らしやすい社会にするには」

今年度の小関ゼミでは、“ITと労働”に関わるテーマを選んだ人が目立ちましたが、この論文もその一つです。

筆者は3年生の時から労働問題、特にワーク・ライフ・バランスに強い関心がありました。今回の論文のテーマもその延長線上にあります。すなわち、フリーランスの労働者（フリーランサー）は時間の自由度が高く、仕事と生活の両立がしやすいのが特徴です。もちろん労働時間だけでなく、雇用関係にない自由さも魅力です。

フリーランスといっても、アナウンサーや通訳・翻訳者、作家、プロスポーツ選手、建築業の職人など業種は様々ですが、この論文ではシステムエンジニアやウェブデザイナーなどのIT系（インターネット上で仕事のやり取りが完結するもの）を対象を限定しています。フリーランス自体は以前から存在していて、珍しくはありませんが、IT系のフリーランスに着目したことに新しさがあり、テーマに取り上げる意味が見いだせると言えましょう。

筆者が、実際にIT系フリーランサーの方に会ってインタビューしたことで、単なる抽象的な論議にとどまらず、フリーランサーの働きかた・暮らしかたを少しでもイメージできたように思います。もちろん、それぞれのフリーランサーは千差万別だとは思いますが、具体例から得られる示唆は大きなものがあります。

論文の内容は、フリーランス全般に共通する課題（社会保険や契約など）が中心となり、IT系フリーランスの独自性（独特の課題）がいま一つ明確にされていないのはやや心残りです。他のフリーランスの職種に比べて、IT系は年齢的に長続きしにくい（高齢者には厳しい）こと、技術革新のスピードが速くついていくのに大変なこと、納期が近づくと極めて多忙になり長時間労働につながるなど、などの問題があると思われます。今後、こうしたIT系独自の課題についても解明が進むことを期待しています。